

# 『秘蹟一母の肖像』にあらわれた芹沢光治良の信者像 — スピリチュアリティの視点からの分析

黄 耀儀

キーワード 芹沢光治良 スピリチュアリティ 文学と宗教 天理教 信者

## 1. はじめに

近現代文学者である芹沢光治良（1896-1993）は、『巴里に死す』、『一つの世界—サムライの末裔』などの作品で、世界文学の舞台に立った。芹沢の文学作品においては神や信仰を追求する主人公の姿、「神様」の登場などの描写が度々見られる。彼にとって神や信仰の問題が生涯を貫くテーマであるからである。

芹沢の信仰の立場を語ると、日本の新宗教である天理教との関係から語らなければならない。芹沢は日本新宗教の一つである天理教に帰依した家庭で生まれたが、中学生時代に、芹沢は自身の就学の道を阻止しようとしたある天理教教団の役員に憤慨して、天理教から離れることを決意した。しかしながら、天理教教団とは距離をおいても、作品にはしばしば天理教の言葉が使われ、彼の信仰観を示している。天理教との特殊な関係があるため、芹沢の作品には天理教に関わる小説が少なくない。『鴉片』（1932）、『秘蹟一母の肖像』（1941）、『教祖様』（1952-1957）、『一つの世界—サムライの末裔』（1952）、『人間の幸福』（1989）などの芹沢光治良の作品の内、『教祖様』の主人公は天理教教祖の中山みきであるが、ほかの作品に登場する主人公は天理教の信者である。

その中で、『鴉片』（1932）という作品は、芹沢の作家活動の初期に、天理教を批判する立場から発表されたものである。その原因は、芹沢の家庭背景にある。芹沢光治良の育った家庭は、父親が、天理教の伝道に生きるために財産を持つことは信仰を妨げる罪になるとして、家督相続した資産を教団に寄付したため、裕福な階級から次第に没落した。さらに父親は、布教のため、光治良だけを祖父母に預けて、妻や残りの子供を連れて故郷を去って行った。そのため、芹沢は、天理教に対して強い不信感を抱きつつ、祖父母や叔父のもと、貧しい生活環境の中で成長することになった。このような親から離れて育ったことの寂しさは、後年の作品によく描かれている。天理教を批判する「鴉片」という

作品を発表した時の芹沢は天理教を心の中から抹殺しようとしていたが、両親の死をきっかけとして、再び両親の信仰に関心を払い、貧困の中で信仰に殉じた父母の生き方を尊敬する思いで、『鎮魂歌』、『秘蹟一母の肖像』、『懺悔記』

(1946) などを書きあげた。この一連の宗教小説は父母が持っていた信仰心に対する自らの誤解に芹沢が気づき、一種の懺悔の思いをこめて書いた作品である。また、これらの作品は父母の信仰に対し肯定する気持ちをえた芹沢の徹底的な自己告発となっている。しかしながら、そこには父母の天理教信仰心を肯定する芹沢の気持ちが読み取れるが、反面それを必ずしも天理教教団に対する肯定に結びつけているとは言えない。『秘蹟一母の肖像』は、天理教布教師であった父母の信仰生活を描き、母親の信仰内実を探求する作品である。この作品の中で、父親と母親の信心に対する比較の描写がある。当時の天理教教条に囚われた父に対して、芹沢は母親の口を通して「自分の心にこそ、神様がいますことを感ずる」と言うのである。こうした母の信仰の捉え方には、教条、教団より、信仰の心だという母の信心のほうが、彼の示したい信仰観であることがあらわれている。

芹沢には、若いとき結核を患い、療養中、死と対峙する日々の中から文学で生きていく覚悟を固めたという人生体験があった。そのため、芹沢は、作品に登場する主人公に人生にある難関が迫ってきた時、ある神聖的なものとつながることによって、新たな人生観、生命観を生ずる様を描写することを好むのである。このように主役が宗教組織の枠に囚われず、不可知な神聖的なものを追求して、個人の意識変容の境地に至る作品基調は、近年の宗教現象である「スピリチュアリティ」の世界に近いと思われる。1990年代以降に台頭してきた新しい信仰形態について、既存の組織的な宗教と対置させる意味で、「スピリチュアリティ」という語を用いて研究する試みが多くなっている。日本では1970年代後半から90年代前半なされた新宗教研究、90年代の半ばになされた精神世界・ニューエイジの研究に続き、現代宗教研究の第三波として「スピリチュアリティ」が位置しており、島園進などがその分析にあたっている<sup>1</sup>。スピリチュアリティの世界にいる人々の信仰形態は、靈性を追及し、個々人の自立を求めを中心にし、宗教組織には好ましくないという特色がある。

なお、スピリチュアリティと芹沢光治良との関連性に関する研究については、弓山達也の研究がある。弓山は『天啓のゆくえー宗教が分派するとき』において、晩年の芹沢本人と友人関係をもつ伊藤幸長という人の宗教組織を取り上げる。弓山は、天理教出身の靈能者であった伊藤幸長のもつ「天命庵」という宗教組織に、自己探求を中心にして、集団としての秩序を共有しないという集団の組織性の低さの特性があるため、彼の宗教活動がニューエイジへの志向が強

いと指摘している。また、弓山は、芹沢と伊藤二人の信仰上の交流関係から、芹沢の宗教観には天理教からの影響があり、そして彼の宗教観がニューエイジ運動にみられる世界観に親和性があると結論を出した<sup>2</sup>。本稿では、芹沢の文学世界においても、ニューエイジ運動を包括したスピリチュアリティ世界にいる人々の信仰形態のような特性が作品の中から見出すことができると考えている。そして、スピリチュアリティの特性から、文学研究の分野ではあまり注目されていない芹沢光治良の文学世界を理解することを試みる。

その素材として、本稿では、天理教信者である芹沢の母親の信仰生涯の物語を描く『秘蹟一母の肖像』(1941)という作品を取り上げ、作中における母親の信心、芹沢の父母のあり方の描写が、特定宗教の枠を超え、個人の宗教心を自由に探求するような「スピリチュアリティ」的な要素を見出し、『秘蹟一母の肖像』にあらわれた芹沢の考えている天理教信者像をスピリチュアリティという視点から検討したい。

## 2. スピリチュアリティ

「スピリチュアリティ」は、一つの霊性追求の信仰運動である。島薺進は、アメリカにおける「ニューエイジ」という表現は、日本では「精神世界」という形をとって目立つようになったが、2000年代に入ると、日本では、「スピリチュアリティ」という語が用いられやすくなったと指摘している。

ニューエイジ運動は、1960年代後半から70年代にかけて流行した世界的な動きであり、かつての世代が盲信してきた近代的合理主義や伝統的キリスト教への反発から、東洋思想や神秘主義などを積極的に採り入れ、内面世界を追求してゆく大衆運動として始まった。やがて宗教文化的な側面ばかりでなく、ニューサイエンス、エコロジー、潜在能力開発、自然医学、ヒーリングなどへと領域が拡大されてゆく。ニューエイジの主張によれば、こうした「新しい時代」は、霊性に目覚め、意識のレベルが向上する時代であり、今まで隠されていた霊能力、超能力が当たり前になり、人間にかぎらないあらゆる存在の心が通じ合い、お互い愛し合い、争いがなくなる愛と平和と調和の時代でもある。そういう時代がまもなくやって来るとニューエイジ世界にいる人々は信じている。このようにニューエイジ運動の姿勢は、きわめて神秘主義的な傾向が強い。

当時日本では、ニューエイジ運動関連の書籍が一般書店の「精神世界」というコーナーに置かれるようになった。それらは、東洋思想、神秘主義、ヨガ、呼吸法、占星術、輪廻転生、シャーマニズム、アニミズム、チャネリング、トランスパーソナル心理学、ホリスティック医療、ニューサイエンス、自己開発、

自己変容、意識の変容、意識の進化、環境保護などをテーマとするものであった。

80年代末以降には、各種のニューエイジ系セラピーが日本で開催され、ニューエイジが書物からの知識としてのみでなく、たとえば身体を動かす「気づきのワークショップ」などを通じて知られるようになっていく。それから自己啓発、ヒーリングや気づき、自分探しなどをキーワードとする書物やセミナーやワークショップが社会一般へさらに広く浸透するようになる。また、アロマセラピーやリフレクソロジー、気功、風水などは、ニューエイジとニューエイジでないものとの境界線を引くことの難しい位置に属する。現在、中核にニューエイジ思想を持ちつつ、ニューエイジより裾野の広い文化活動には、スピリチュアリティという語が大いに用いられている。

これらの霊性追求運動の当事者は、これが「宗教」とよばれることを好まない。「宗教」ではなく「精神世界」、「スピリチュアリティ」、「霊性」に関わるものだと主張するのだ。島藺進によれば、典型的なニューエイジ運動の信念では、人間個々人のうちに潜みつつ、個を超えて宇宙を包摂する存在につながるような「大いなる自己」(Higher Self)がもっとも重要な聖なるものの現われとなる、とされている<sup>3</sup>。「大いなる自己」とは個人のもっともスピリチュアルかつ知的な部分で、日常的な人格ないし自己である自我(エゴ)や、個人的無意識を越えたものといわれ、これとの接触から英知や導きを引き出すことができ、これには「超意識」「内なる神」「神性自己」などさまざまな呼び名がある。そして、この「大いなる自己」を導出し補佐するものにはさまざまなものがあり、書物印刷物、音楽、メディアなどの情報、教団人物、学者のほか、指導霊(spirit guides)というものもある。ニューエイジ領域では、指導霊とは超越的存在で、人が生まれる前に選ばれているものであり、指導霊に触れることができればどんな場合にも彼らの指示を仰ぐことができ、人生の高次の目的に向かって歩めるという<sup>4</sup>。

また、ヒーラス(Paul Heelas)は、ニューエイジ運動に典型的に見られる、超自然的な存在との交流による自己霊性の喚起といった文化的諸実践を、既存の社会や文化に抑圧された本来の自己の聖性を取り戻す探求行為であるととらえている<sup>5</sup>。なお、伊藤雅之は欧米のニューエイジ運動や日本の精神世界の領域を包摂した「スピリチュアリティ」(霊性)を、「おもに個々人の体験に焦点をおき、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在(たとえば、大自然、宇宙、内なる神/自己意識、特別な人間など)と神秘的なつながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚をもったりすること」と定義している<sup>6</sup>。伊藤によれば、この定義には少なくとも三つの特徴が

含まれる。第一は、宗教を構成するいくつかの要素（教義、組織、礼儀、体験など）のうち、当事者の体験を特に重視する点にある。第二は、その体験のなかでの何かとの「つながり」に着目する点、そして、第三にはつながりを通しての「気づき」（新しい生き方の発見、心の成長、自己の再認識など）が生起する点にある。また、伊藤の言う自己がつながる対象としては、自己の内面（内的宇宙、本当の自分）、他者（教祖、恩師、恋人など）、家族（親、先祖、子供）、共同体（地縁、血縁、社縁、信仰に基づくもの）、国家、世界、地球、自然、宇宙、神などが指定される。また、何かとつながる行動に至る手段として現在、瞑想、ヨーガ、気功などがあるという<sup>7</sup>。

樫村愛子・福田はるみの研究においては、日本の「精神世界」（スピリチュアリティ）は従来の教団宗教とは異なる固有宗教的構造を持ち、そこには教義・組織に関わる脱制度化という特徴があると指摘している<sup>8</sup>。つまり、スピリチュアリティ（靈性追求運動群）の人々が、ある不可知、不可視の存在と神秘的なつながりを得て、「大いなる自己」、「神性自己」を啓発し、人生の高次の目的に向かって歩むことができるとする運動形態は、事実、伝統的な宗教団体の信仰活動と異なるのである。また、これらの人々は、個々人の自発的な探求や実践に任せる傾向が強いのであり、特定の宗教団体に入信し、固定的な教義や教団組織や権威的な指導体系、あるいは「救い」の観念といったものを持つことにあまり関心を払わないのである。

以上の論述によって明らかだが、スピリチュアリティを追求する人々は、精神指導師あるいは神秘的な存在である「聖なるもの」とのつながりによって、「大いなる自己」を啓発して、「自己変容」を遂げるようになる。また、彼らにはこの過程において、「団体組織とのつながりが弱い」、「神秘的な存在を追及すること」、「権威的な枠に留まらず自立すること」などの特徴がある。そのため、次節において、これらの特徴から芹沢光治良の『秘蹟一母の肖像』にあらわれた彼の考えている信者像を見てみよう。

### 3. 『秘蹟一母の肖像』からみる天理教信者像

#### (1) 作品の基調—信仰に生きた母の姿を肯定した自己告発

『秘蹟一母の肖像』は、信仰を離れた弟に、姉が手紙で信仰の道に生きた母の姿を伝えるという作品である。作品の基調としては、天理教信仰に生きた母の姿に感服した自己告発なのである。この「自己告発」とは、元々父母の天理教信仰に批判的である「古い自己」を懺悔し、父母の信仰の本質が真に理解できた「新しい自己」をなす意味である。

芹沢光治良の両親は、ほぼ時を同じくして天理教の教えに触れ、明治25年(1892)婚姻を取り結んだ。作中の「姉」は「貴方」と呼ぶ弟を終始徹底的に告発しつづけるのである。この「姉」は父母の信仰を継いだ人であり、芹沢にとって、他者の信仰を理解しうるまでに成長した新しい自己である。一方「貴方」は父母の信仰を蔑視して生き、父母の信仰を批判する小説を書く弟であり、そこに、芹沢は父母の信仰に批判的であった古い自己を仮託した。「姉」による「貴方」の告発の烈しさは例えば次のような部分にみられる。

小さい時から、貴方ははなれて、祖父母の家で育って、ほんとうの姉弟だと感じあえなかったからでもあります、また、貴方は両親の愛情もしらず、両親の生活や信仰をしらなかつたからこそ、機会ある度に、あんな風に的を外れて、きつく両親の信仰を公に批判したのでしょう。

信仰を批判したつもりで、実に信心する者にはとるにたらないような教会の組織や教団をあげつらっただけで、人間のまこと、人間の心に秘められた永遠の憧憬—信仰自体については、貴方は全く盲目も同然で、触れることさえできなくて、私などはかえって同情いたしております。(『秘蹟—母の肖像』<sup>9</sup>、p.34)

『秘蹟—母の肖像』は、常に自分を父母に捨てられた子に例える弟にあてて、姉が、父母の信仰に対する誤解を晴らすという意図をもって書いた手紙という形式をとっている。そのために彼女は両親の信仰の実相、特に母の信心の内容・意味を弟に詳しく、細かく語って聞かせているのである。

『秘蹟—母の肖像』に描かれている母の像を見てみよう。天理教に深く帰依して、家産を教団に寄付して、一生、天理教の伝道生活に入ることを決意した夫に従って、母親も天理教信仰に自身を奉獻した。しかし、二人の決意は、親類に軽蔑された。さらに母親は実父に子供を連れて実家に帰るように勧められたが、それを拒絶して、実家との関係を一切絶った。実家について子供達は「母から何か聞けるものと期待しましたが、ついに一言も聞け」(前掲書、p.47)なかった。このようなことは、芹沢にとって「母の精神の強さを知っただけでした。母の精神の強さといえば、父を無所有の生活に甘んじさせたのは、母のお力だったと思われます」(前掲書、p.47)と書いている。

当時の布教活動は主に「病氣直し」の活動であり、天理教の布教師が患者に「おさづけ」をするのが一般であった。「おさづけ」とは、天理教用語であり、布教師側からの患者の病気を治療する「手をふる」行為である。『秘蹟—母の肖像』においては、父親と同じく布教師である母親は、父親の天理教信

仰に対する熱情に負けないほど、布教に専念している。たとえば、毎晩、山の麓の家へ行って、あるハンセン病患者に「おさづけ」をすること、ある富豪の令嬢の目を治療することなどである。ことに令嬢の眼病の治療について、芹沢は詳しく描いて、母の偉大さを見せる。作中、語り手である姉の回想によれば、令嬢の眼病のために、母親は毎晩彼女の家へ行って、「おさづけ」をするほか、「令嬢の眼にたまる目脂のような膿をご自分の舌でいねいになめ取ったそう」（前掲書 p.41）である。ようやく、令嬢の眼疾が奇跡のように全快した。父母の立てた小さな布教所にいる全員も皆この奇跡で喜んでいた。

世間の蔑視にくじけず、赤貧に耐え、信仰に生きた母親の生涯は、一般人にとって、苦勞で不幸であるように思われるであろう。だが、「私は母の一生も、不幸そうに見えたが、しあわせだったろうと、本心思った」<sup>10</sup>という母の人生に対する芹沢の評を見れば、彼女の辛勞の人生を支えるのが天理教信仰であることがわかる。これは、作者が示しているひとつの信仰に生きた天理教の女性信者像である。

## （2）作品の中における父母の信心に関する描写

『秘蹟一母の肖像』においては、父母の信心に関して、以下のスピリチュアルな描写がある。

父は神という観念に憑かれていましたが、その神を目で見たかったです。神の存在する証拠を握りたかったです。それでなければ、俸せはなく、神様のさとしようにあらゆる欲をすて、お道一筋に生きることができなかったからです。その点、父は母にくらべて不信であったのかも知れません。

母はそれを不信な態度であるからといまして、お道一筋に生きなくても、屋敷の内に小さい教会を建ててあるから、そこで家族が祭礼して、それまで通り平和に暮すことで満足するように、それもまた立派な信仰者の生き方であると、説いたそうです。

（略）

甘露台の建設とは、実は、人間の精神の建直しを意味するので、永遠の課題でありましょうし、甘露水とは、慈悲のみちた母乳を象徴したものでありましょうが、父はそのころの全信者と同じように文字通りに解釈して、その神の誓約する甘露水を、今自分にさずけてもらえれば、それこそ神様の存在する証拠であり、ご自分の懊悩している問題も、しぜんに解決して、よるこんで神様の命令にしたがって全財産をすてて谷底におちようと、無

謀な願望を持つようになりました。

その願望をうちあげられた母は、神様に証拠を求めようとする父の精神をさもしくも思い、自分の心にこそ、神様がいますことを感ずるからと戒められました。

(略)

父は翌朝未明に母をつれて裏へ出られた。屋敷の奥はまだ薄暗かったが、網倉の間をぬけると、暁光がさしているように薄明るく光芒が見えるのです。二人の足は無意識に引き寄せられるように、そちらへ歩みよりましたが、一枚の蓮の葉から、黄金色に光がほとぼり出ていました。その大きな葉は、池の畔りにごく近くて、かすかにゆれていましたが、二人は思わず顔をよせるようにして、その葉をのぞきこみました。緑の大きい葉の芯の方に、乳色をした真珠のような玉が、微かに動いて微光を放ち、その周囲を仄明るくしているのです。父も母も言葉をなくして、胸一杯になって合掌し、その露のような玉を暫く茫然と眺めていました。

神様はちゃんと手に触れるようなところにいらして、取るに足らぬ父の悲しい願いをかねて下さるのだ——そう思うと、母はもったいなさに、自然に地面に坐り、額を地に伏せて、大神様を礼拝して、父の不遜な心をお詫びしましたが、その間に、父はその露のような珠を掌に受けて、おしいただくように飲んでしまい、飲み終わると、母を呼びました。

「さあ、お前もいただきなさい」と。

母は驚き、父の顔を仰ぐと、

「さあ、いただきなさい、わしは体中に神様のお力が流れこんだような気がする」

と、顔を輝かせて歓喜を伝えられないような様子。母もよろこんで、蓮の葉をのぞきこみましたが、小さくなった真珠が浮かんでいます。母は畔りにひざまずき、口をあけて、蓮の葉を傾けてその珠を転がしこむようにいただきました。小さい珠は口中に冷たくひろがって、香気のある乳のように甘かったそうです。

二人は期せずして立ち上がり、拍手を四つうって、感謝しましたが、その時は蓮池にいっぱい朝日がさしかかり、全部の蓮の葉が光の中に浮きあがるように輝いていました……

これは父と母とから聞いたままの話です。父も母もこの話を別々にただ一回してくれたきりですが、その時父は顔を輝かして申しておりました。その甘露水をいただくと、全身が急に熱くなり、力が漲るようで、それまでなかったものが、自分の裡に産れるようなよろこびが感じられた……



と。

私はこの美しい話を聞きながら、涙ぐんだことを覚えています。父も母も確かに神を見、甘露水を授けられたのでしょ、私はそれをかたく信じます。

貴方は父が教会で祈っている間に夢を見たのだらうとか、あの甘露水が蓮の葉におりただの朝露で、黄金に輝いていたのは朝日の反射であらうとか、主張したいことでしょう。貴方は悲しい実証主義者で不倖せな方ですから。(前掲『秘蹟一母の肖像』pp.49-51)

以上の描写の中の父母の姿は、現実の芹沢の父母の姿にどれぐらいつながるのかという信憑性を問うのが本論の中心ではない。父母を小説の登場人にした作品から見られる作者が考えている理想的な信者像を検討することを主にする。

また、以上の描写内容で、信仰の本質に関わっている重点、例えば、権威的地位に据えた天理教教団の籠に入っていた父親の宗教組織への依存性、天理教信仰に生きた母親の信仰上の自主性、また、池の畔で神聖の大自然とのつながりによって、真の「甘露水」(信仰の真髄)を得た二人に肯定した作者の心境などがある。これらの父母の信心、信仰の本質に関する描写内容は、第二節で提起している、「団体組織とのつながりが弱い」、「神秘的な存在を追及すること」、「権威的な枠に留まらず自立すること」などのスピリチュアリティの特徴には共通していると思う。そのため、次に、「特定の宗教団体に依存しない」、「聖なるものとのつながり」、「権威的な価値観や枠から脱出した自主自立」という三つ特徴から検討して、真の信仰に生きた母の肖像を強く描いている作者が求めている理想的な信者像を見出したい。

### (3) スピリチュアリティの視点からの分析

#### (1) 特定の宗教団体に依存しない

前掲の内容の中に書かれている甘露台、甘露水、甘露台の建設と教団との関係を見てみよう。『天理教事典』によれば、天理教教会本部の神殿・礼拝場は、ちば(人間の発祥地)を芯にして建てられている。そのちばに据えられた台を甘露台という。天理教の救済を具現する方途として教えられた「つとめ」の儀式は、ちば・甘露台を囲んで行われる。天理教の信仰と救済の根源がここに表されている<sup>11)</sup>。同じく『天理教事典』によれば、ちばに甘露台を建てて、「つとめ」儀式を勤修すれば、天から甘露が授けられる。それをもらうと寿命薬となり、いかなる病もなおり、死なず(不慮の死をとげない)、弱らず、115歳の定命まで長命するだけでなく、心次第に

いつまでも生きることができるという珍しい守護を約束されている。そして、この世界も陽気ぐらしの世界となる<sup>12</sup>。また、芹沢のいう甘露台の建設とは、「そのころ天理教では、神様をたたえるために、教会の建築に熱心な傾向がありました。ご本部で甘露台の建設ということ、信仰の終極の目的のように考えて、努力した影響もありましょうが、部下の教会でも、精神の改革のふしんという象徴的な言葉で説かれたお筆先の意味を、文字通りに建築という風に直訳して、神殿の建築に意をそそいだようです。信者の間でも、信仰の情熱を神殿の建築に凝固させないではいられないような風潮がありました」（前掲『秘蹟一母の肖像』、p.56）という内容からみれば、当時の教団本部の神殿建築を指すと考えられる。こうした教理の下で、信仰と救済の根源を象徴する甘露台と神水のような甘露水は、教会の神殿との不可分の関係とされている。

それに対して、芹沢は「甘露台の建設とは、実は、人間の精神の建直しを意味するので、永遠の課題でありましょうし、甘露水とは、慈悲のみちた母乳を象徴したものでありましょう」（前掲書、p.50）と捉えている。また、「父はそのころの全信者と同じように文字通りに解釈」（前掲書、p.50）したと考えると、芹沢にとっては、教団の存在と教条は人の信仰の自由さを教会の統御に縛り付ける意味に等しいと言える。教条に囚われた父と当時の信者達に対して、芹沢は母親の口を通して「自分の心にこそ、神様がいますことを感ずる」（前掲書、p.50）と言うのである。作者が「父は母にくらべて不信であったのかも知れません」（前掲書、p.49）と述べていることから考えると、教条、教団により、信仰の心だという母の信心のほうが、立派な信仰者としての基本的態度である。つまり、宗教に癒されてから組織に依存するのではなく、癒されてから宗教組織の籠から飛び立てるようになるという信仰の自立こそ、作者が望んでいる信者としての最も重要な条件である。

## (2) 聖なるものとのつながりによる自己変容

池の畔にいる父母の姿の描写には、「聖なるもの」とのつながりによる意識転換という概念がある。朝露を飲み、大自然に礼拝した後、「わしは体中に神様のお力が流れこんだような気がする」、「自分の裡に産れるようなよろこびが感じられた」、などの描写がある。この描写からみれば、この時の「聖なるもの」は、身近な大自然とも、あるいは、教条に囚われない二人の信心とも言ってよからう。「父も母も確かに神を見、甘露水を授けられたのでしょ、私はそれをかたく信じます」という語り手の言葉によれば、

作者はその時、父母が悟ったことを次のように語りたかったのだと思う。甘露水は必ずしも教会の決め付ける儀式によってのみもらえるものでなく、甘露台も必ずしも教会神殿にあるものではない。神へ向かう真心さえ持てば、神は心にいる。こうした考えで、信心さえあれば、朝露のような大自然から授かる身近なものでも、甘露水である。信心さえあれば、心には甘露台がある。甘露台とは形而下のものではなく、神への精進を続ける人間の清められた精神である。作者が読者に伝えたいのは、父母が「神を見、甘露水を授けられた」ことは、目に見える物質の存在ではなく、心に刻んでいる神への信心を表していることではないかと思われる。蓮池への近づき、朝露のひと口、大自然への礼拝など、「聖なるもの」とつながることによって、父母（特に父）は、形式的な教条に留まる古い自己から抜け出し、もう一つの信仰の真髄を悟るようになった。すなわち、二人とも聖なるものとのつながりによって、「大なる自己」「神性自己」を発見して、「自己変容」を遂げたと見えよう。

芹沢は、このような父母の信仰が「現在の天理教会の会長等とちがって、職業的ではなく、いってみれば聖フランシスのように純一で清浄」<sup>13</sup>であると述べている。こうした清められた信心を持つ父母は、作者にとっては、聖人のような「聖なるもの」の存在であると言えよう。だから、『秘蹟一母の肖像』の語り手である「姉」は、父母の信仰を理解しうるまでに成長した新しい自己である。この新しい自己である「姉」に、父母の信仰に批判的である古い自己を仮託した「貴方」（弟）に対して、父母の信仰の立派さ、偉大さを語らせている。すなわち、この作品を通して、作者は、父母の清浄な信心に触れることによって、父母の信仰への誤解を持った古い自己に告別して、信仰の真髄がわかる新しい自己になったことを表している。こうして、作品を通して、神秘的なものとなつて自身の精神の変革にもつながっている父母の姿を理想な信者像のモデルにした作者自身の心境の転換をも見られる。

### (3) 権威的な価値観や枠から脱出した自主自立

ここでは、作品に描かれている母の信仰の生涯から、芹沢光治良が考えている理想の女性信者像を検討したい。それが『秘蹟一母の肖像』に描かれている「権威的な価値観や枠から脱出した自主自立」の「女性信者の肖像」なのである。

作品において、母親は実家と義絶までして、父と共に信仰に生きた女性である。このような母の人生は、自分をなくして、夫に女奴隷のように仕

えるような家父長制社会の望んでいる女性の人生ではなく、妻・母・娘という役割意識以外の「自分」を見つめ、独立の人格、個性、思想を持ちながら、夫と対等な関係で、共に信仰の道を歩む女性の生き方である。教団の権威的な教条に囚われた父親に対して、母親はただ夫の信条に一方的に従うのではなく、精神補佐者のような者として、自身で理解した信仰を夫に説き、夫と共に信仰の真髄を探る生涯伴侶である。夫婦が幸福になるには、独立の人格、思想を持つような自立した女性が必要である。その一方、男は女の独立の思想を尊重して、共に二人が理想とした生活を送る。こうした夫婦観は、従来の家父長制社会の家族倫理観という既成の秩序、枠に留まらず、従属的關係ではなく、対等的夫婦関係を軸とする新しい倫理観であると言えよう。また、このような母親は、男に負けず、一人で布教活動ができ、教団の権威的教義の枠に囚われず、天理教の教えを独自で理解し、自身で望んでいる信仰生活を送る独立な女性である。これらが、『秘蹟一母の肖像』を通して見出される芹沢の女性像、夫婦像である。また、『秘蹟一母の肖像』においては、男性に負けることなく布教に没頭して、夫とともに信仰に生きた女性の生涯描写が、我々に戦前の天理教の女性信者像をも提供している。

#### 4. 結び

本稿では、「特定の宗教団体に依存しない」、「聖なるものとのつながり」、「権威的な価値観や枠から脱出した自主自立」というスピリチュアリティの特徴を手がかりに、芹沢光治良の作品である『秘蹟一母の肖像』にあらわれた彼の考えている信者像とスピリチュアリティ世界との共通性を見出した。

『秘蹟一母の肖像』の主人公である芹沢の母親は、実家と義絶して、世間の蔑視を受け、赤貧に耐える生涯を送っていた。彼女の辛勞人生を支えたのは天理教信仰であるが、ただ、無意識に布教師である夫に従うだけの信仰生活ではなく、独自の思考を持って信仰の人生を歩むのである。教団の教条に囚われた父と当時の信者達に対して、母親は教団、教条より、信仰の心が重要だという信念を示している。このような母の信念は、作者の示したい信仰観であると思われる。また、作中、蓮池への到達、朝露のひと口、大自然への礼拝など、ある超自然、不可知な「聖なるもの」とつながることによって、父母（特に父）は、形式的な教条に留まる古い自己から抜け出し、もう一つの信仰の真髄を悟るようになった。彼らの求める甘露台は、教団の神殿にあるものではなく、目

に見える物質の存在でもなく、神への精進を続ける人間の清められた精神であり、それこそ信仰というものである。このような父母が心を合わせての信仰は、教団と関係なく、「聖フランシスのように純一で清浄」である。また、こうした夫婦関係において、母親が自身で理解した信仰を夫に説き、夫と共に信仰の真髄を探るという描写からみれば、母は自分をなくして、夫に仕えるような家父長社会の望んでいる女性像と違って、独立の人格、個性、思想を持ちながら、夫と対等な関係で、共に信仰の道を歩む女性である。むしろ、独立の人格、思想を持つような自立した女性こそ、夫婦が幸福になるには必要な鍵である。これは、『秘蹟一母の肖像』を通して見出した芹沢の女性信者像である。

教団と信者の関係について、少し天理教の発展史を踏まえて芹沢の立場を述べておきたい。団体組織に頼らず、「聖なるもの」とのつながりによる自身の精神向上に重点が置かれる芹沢の作品の特性に対応するようにして、天理教の女性観の発展史からみれば、教祖時代において、中山みきは「女は穢れない」、「男女隔てなし」の言葉を使い、女性解放、男女平等を説き、また宗教儀礼において男女五分五分の和合・共働による人間世界創世を唱えるなど、革新的なジェンダー観を示している。後に、教祖の素朴な言葉を教団内で教理理論化する過程において、教団の女性観は、当時の国家社会の状況との妥協の結果生まれたという特徴がある。たとえば、女性としての役割は、明治期及び大正期の天理教教団においては、家父長社会の伝統的性的役割の規制に留まらず、男性信者に負けずに宗教活動の主役として布教一筋にするように教えられていた。

しかし、その後、女性の役割は、近代的な性別役割分業観に立つ良妻賢母思想への教団の対応によって、大正末期から戦争期を経て、女性に固有な役割としての「夫の内助、子の産み育て」へと変化していく<sup>14</sup>。このような女性観の変遷は、家父長制社会の作り上げた上下従属関係である男女観を打破し、男女共働による新しい理想世界をなすという中山みきが提唱した革新性を後退させ、近代性別分業観の立場に立つ男性中心的主張・構造を容認するものとなる。人間の精神向上を重視する芹沢文学の特性に対して、教団はもちろん人間の精神向上は重視するが、教団内信者を国家社会との妥協の上で、ある秩序の枠組みの内に規制する面も持っている。こうした教団のあり方に対して、芹沢には、天理教教祖中山みきの生涯を描く作品である『教祖様』において、「教団ということは、神の教えにも、人間の信仰にも、さして関係がないことだが、教団ができる、信仰がそれに結びつけられて、神の教を曲げることが、しばしば起きる（多くの宗教の歴史がそれを示している）」（『教祖様』p.160）という教団批判のコメントがある。実際に、『教祖様』には、教団成立を認めず、真の信仰世界を求めている教祖中山みきと、教団を作ろうとする弟子との理念の衝突に

関する描写が少なくないことから、芹沢の教団批判の立場が顕著に見られる。

以上、母親の信仰の生涯を語る『秘蹟-母の肖像』から見られた芹沢の求めている信者像には、内実の探求、あるいは既成の秩序社会の古い価値観に留まらず、宗教組織に囚われない神への精進という自立自主の姿勢がある。これが、「特定の宗教団体に依存しない」、「聖なるものとのつながり」、「権威的な価値観や枠から脱出した自立自立」というスピリチュアリティの特性にもつながっている。また、このような理想な信者像を示している芹沢自身の宗教観は、スピリチュアリティ世界と共通していると言える。

## 引用文献

- 1 星野英紀、池上良、氣多 雅子、島菌進、鶴岡 賀雄『宗教学事典』丸善、2010、p.21
- 2 弓山達也『天啓のゆくえ-宗教が分派するとき』、日本地域社会研究所、2005、p.284
- 3 島菌進『精神世界のゆくえ-宗教・近代・霊性』、秋山書店、2007、p.28
- 4 前掲島菌進『精神世界のゆくえ-宗教・近代・霊性』、pp.85-86
- 5 Heelas, P. *The New Age Movement*, Blackwell, 1996
- 6 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ』、溪水社、2003、p.43
- 7 前掲伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ』、pp.43-44
- 8 檜村愛子・福田はるみ「個人インタビュー調査から見た「精神世界」の宗教性と社会性」、『宗教と社会』別冊、「宗教と社会」学会、1999、p.29
- 9 芹沢光治良「秘蹟-母の肖像」、『近代日本キリスト教文学全集 芹沢光治良・小山清・北条民雄・太宰治・坂口安吾』、教文館、1975
- 10 芹沢光治良「わが心に生きる母 夫と子等と神とに捧げた生涯」『主婦の友 昭和31年2月号』（第40巻・第2号）、1956、pp.340-341
- 11『改訂 天理教事典』、天理教道友社、1997、p.239
- 12 前掲『改訂 天理教事典』、p.239
- 13『芹沢光治良作品集第三巻一月報一』、新潮社、1974
- 14 大谷渡「天理教の女性観」『天理教の史的研究』、東方出版、1996